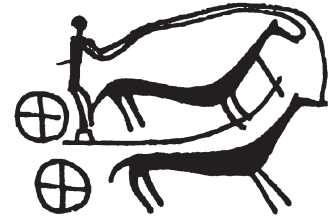


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 79



- クラス担任・科目責任者からひとこと (3 ページ)
- TA 研修会を開催 —192 名に修了認定— (8 ページ)
- 筑波大・北大共催国際シンポジウム開催 (14 ページ)
- クリッカーをアンケートに活用 (16 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

新しい学部教育に向けて、全学教育の充実の方策

高等教育機能開発総合センター長 脇田 稔

2009 年度も 2,500 名余の新入生を迎え、新たな活動が始まりました。昨年 12 月末に中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」が提出され、今後の学士課程教育の進むべき方向が示されました。ここでは多くの重要な改革が大学に求められています。北海道大学ではすでに 21 世紀における教育の取り組みを始めておりますので、いくつかの項目について述べることにします。

単位制度の実質化

GPA 制度の定着

社会は大学に対して、学生の学習に対して払った

努力とその成果について、具体的、実質的な証明を求めています。これは従来の合格科目数、取得単位数の提示では証明として不十分であることを意味します。

これに対して GPA 制度は次のような利点を持ちます。単位取得数以外に、学生個人が、受講した科目をどれだけ勉強したか、半年間または 1 年間で全体としてどれだけ勉強したか、努力したかなど、いろいろな切り口で、個人の努力の成果を数値として示すことができます。また、科目毎、学期毎あるい

は通年単位で、所属する集団（たとえばクラス、学年）の中で、自分がどの位置にあるかを示すことができ、同時に、学習に対する自分の努力がどのように報われたかを知ることができるよい制度であると思います。このため、全学教育に定着し、学部教育にも利用が進んでいます。

登録単位数上限設定と自由設計科目導入

続いて履修登録単位数の上限設定が導入されました。これは、従来の自由な科目受講制度は自然で効果があるものでしたが、自由登録制による、登録授業の途中放棄、不受験などの問題も顕著になってきました。同時に適切な規模で講義室を振り分けることが困難になるという実務的な問題も拡大してきました。そこで、履修科目数の上限が設定されました。これは単に受講科目数を制限するというより、学生諸君に、受講科目を厳選して各々が個人のカリキュラムを組みあげ、それを計画通りに学習し、計画的に単位を取得することを求めている点に大学の意図があることを理解してほしいと思います。

この制度は、学生の自習時間の増加、少人数授業の増加など、それなりの効果を上げています。しかし、上限設定が窮屈である、余裕があるので、もう少し自由に授業を受けたいという意見も出てきました。そこで、学生諸君の知的好奇心に応えるために、上限を超えた単位登録を可能にしました。これが本年度から導入された「自由設計科目制度」です。上限単位数を超えて最大6単位の受講が可能となります。自由設計科目として得た成績は、のちに上限単位数内で登録した授業科目と入れ替えることもできるシステムとなっています。

これらの諸制度と、従前から授業担当の先生方をお願いしている厳格な成績評価を総合して、単位制度の実質化が実現するものと思っています。

教育課程の体系化・構造化

幅広い学習のための取り組み

いわゆる初年次教育として、幅広い教養教育を行うために、北大では教養科目と基礎科目とからなる

全学教育カリキュラムを展開しています。全体に、一般教育演習（フレッシュマンセミナー）における少人数教育を推進し、総合科目の単位数を1単位に変更し、主題別科目などとともに学生諸君が学問的満足度を広げる取り組みになっています。また、語学教育では、英語と初習外国語にCALLオンライン授業を導入し、読み・書き・聞き・話すについてのバランスのとれたコミュニケーション能力養成に効果を上げるとともに、学習時間の柔軟性が増す仕組みとなっています。

キャリア教育

大学全入時代を迎え、大学は純粋な学問追究の場から、社会人としての基礎力の養成、学部・大学院を通じての教養を備えた専門的な人材の養成の場としても社会から期待されるようになっていきます。学生諸君は、将来の自分の職業について意識しながら日常の学習をすることが求められています。将来の就業を予想し、それに求められる知識と能力を分析し、これらを身につけるための自分用のカリキュラムを作ること、すなわちキャリアデザインが求められるようになっていきます。これからは、キャリアデザインのための教育も充実してゆくつもりです。

入学者選抜の改善

多様な入試方法の導入

今までも、北大は学力試験のみによる入試以外に、各学部で多様な入試を展開してきました。平成23年度からは、第二次選抜に総合枠入試制度を取り入れることになりました。これは、入試の際に学部で専攻する専門分野を特定しないで入学し、入学後に大学の学問水準と内容に触れてこれを理解し、自らの能力、特性、希望に従って専攻する専門領域を決定できる制度です。種々の理由で、理系では一部、文系では大部分に学部別入試が残る形で出発します。1年目の教育に大きな変革が起こるとともに学生諸君の学習の自由度が増すと期待されています。現在、体制作りに鋭意取り組んでいます。

(理事・副学長)

全学教育 GENERAL EDUCATION

クラス担任・科目責任者からひとこと

うれしい担任

「オヤジに1年生の担任なんか務まるのかよ」と同業の息子に揶揄されつつ引き受けたのですが、結構楽しんでます。なにが楽しいって？

ちょっとテレるけど毎週、一年生特有の輝ける瞳に会えることです。

キザに聞こえるけど、これはホント。

次々と大事な事を忘れていきます。年ですね。でも18歳で大学生になった時の事を、それこそ何から何まで覚えているのです。最初に会った友達、下宿の佇まい、自分が着用していた服の色まで。怠け者の私のことですから、勉強するぞなんて思ってい

経済学部11組・クラス担任 教授 濱田 康行
なかったけど、自分の前に大きな広場が広がっていて、どこにでも行けるという解放感があった。

時は移り世代は変わっても、自由を得、希望を持っている人々の目は輝いている。担任というのは何の責任を担っているのか、ほとんど自覚しないままですが、この光は消したくない。やや自己中心的ですが、私の講義に失望して大学がイヤになるなんて事だけは避けたいのです。でも、そう思って力が入り過ぎ前回はちょっと失敗。なにしろ満員の教室なんてこの数十年経験してないのでと自分に言い訳して、次回の戦術を巡らしています。

私の研究室から高機能センターの教室までゆっくり歩いて20分。これまでのところ天気にも恵まれて、春の北大とともに担任を楽しんでいます。

クラス担任をお引き受けして

私の所属する理学部では、各学科からそれぞれ毎年2名がクラス担任・副担任に当たり、生物学科では任期1年のローテーションで全教員がこれに対応しています(私の個人的な理解なので間違っているかもしれません)。いわば機械的な順番で担任を引き受けることになるわけですが、当然、教員の中にはクラス担任という職務に適した方もおられれば適さない方もおられるでしょう。

私などはおそらくこの職務に最も適さない人間に属しているかも知れません。とは言え、お引き受けした以上は、最大限の努力を払って職責を果たして行きたいと思いつめていた次第です。今のところ、4月7日のオリエンテーションも事なく終え、その後、欠席届や退学届、奨学金などの問い合わせに対応した以外、クラス担任としての業務をことさらに意識することはない状況です。

理学部18組・クラス担任 教授 高畑 雅一

本学出身の私が入学当時を思い起こすに、私のクラス担任は、旧教養部で「鬼のARKW 仏のMZTN」と並び称されたそのARKW先生でした。もちろん敬して近づかず、私を含めクラスの学生が担任と接触したの

は、その先生の試験結果と最終成績を聞きに行った時だけだったはず。今は、GPA制度をはじめ成績評価が<厳正>かつ<客観的>となり、高等教育機能開発総合センターにはもはや鬼も仏も存在しないかもしれません。いずれにせよ、一人の生身の人間として、この1年、これから起こる一つ一つの問題に誠心誠意を尽くして対応していく所存です。

「情報学」について思うこと

「情報学」企画責任者 情報科学研究科 教授 工藤 峰一

「情報学」とは？ ほぼ創世記から携わっている私ですらこの問いに明快な答えをもちません。「情報＝驚き（の価値）」、「知識＝（情報の）検索＋整理＋記憶」、「学問＝（知識の）獲得＋再生産」という三つの等式に「知識の再生産→驚き」の推論規則を追加すると直ちに、「学問は自分が驚き、人を驚かせるためにある」と結論できます。その学問ループのなかで「情報」は、伝達される対象であり取捨選択されて知識へと昇華されるものです。つまり、「情報学」とは、「（分野を問わず）学問自体を生き生きと育むための媒体を研究する学問」というメタな解釈に至ります。いかがですか？

さて、「情報学」を学ぶ学生の皆さん。コンピュータとインターネットにより我々が得たものは「検索速度の向上」と「情報の爆発的分散」であり、知識が増大したわけでも学問分野が急速に発展したわけ

でもありません。なぜなら、情報を知識に昇華するには、貴方たち自身が、得た情報をきちんと吟味し、他の知識に照らして整理する必要があるからです。情報を得たり発信したりする「技術」を学ぶのではなく、情報を知識へと昇華させる「態度」を学んでください。これは、批判的に物事を考えるということです。文理を問わず、科学的な視点を持つための共通な態度です。この態度を身につけてはじめて、先人の知恵を自らのものとする喜びを知るばかりか、その喜びをもっと大きなものとして他の人に伝えられるようになります。これこそが大学で学問を学ぶ醍醐味です。

新「英語演習」管見

「英語」企画責任者 メディア・コミュニケーション研究院 教授 小川 泰寛

施行されて早4年目になる新カリキュラムで、以前にも設けられていた「英語演習」は、新しい理念と形態のもとに展開されています。本科目については、こうした点のもとより、授業担当者からの興味深い反応も含め、本誌2007年11月号で前「英語」企画責任者により、既に紹介されています。ここでは、現況の一端に触れつつ、考えを少々記します。

「英語演習」は、1年次1学期に実施されるTOEFL-ITP試験の成績を基に初級、中級、上級と習熟度別に開講されていますが、上級は設けられていないものの、同様の展開がなされている「英語Ⅲ」、「英語Ⅳ」と少々趣を異にして、レベル別の原則が必ずしも守られていないように思われます。例えば、初級と中級の分水嶺として設定してあるTOEFL-ITP420点をかなり上まわる人が初級クラスに混じっているケースが、たまたま見られます。その逆はほとんどありません。学習者の選択に主体性を出来る限りもたせるべく、敢えて、運営はある程度ゆるやかに行われていると推察します。しかし

ながら、やはり本来のレベルのクラスで受講するのが望ましいのは、言うまでもありません。

TOEFL-ITP500点以上がおおよその目安となっている上級の受講生が、英語教育系の期待に反し、各クラスで非常に少ないのは残念です。「英語演習」を含む、外国語の演習科目で、今年度から、受講生が3名以下の場合、開講が中止されることになりましたが、不幸にして、本科目上級クラスのいくつかで、そうした事態が起こってしまいました。難しそうで敬遠している人もいるのでしょうか。しかし敷居は決して高くありません。英語母語話者が本授業を教えています。皆、学習に優しい環境の構築を心がけています。チャレンジしてみてください。履修後の達成感には低くない、と信じます。

全学教育委員会報告 (第76回)

平成21年5月15日(金)に第76回(H21年度第1回)全学教育委員会が開催され、つぎのような議題について話し合いました。

議題

1. 全学教育委員会小委員会の構成
2. 全学教育科目における不正行為について担当する委員の選出
3. H21年度全学教育委員会の検討事項
4. H18年度導入の新教育課程に関する中間評価報告書の作成

報告事項

1. 附属図書館北分館委員会委員の推薦
2. H20年度第2学期のGPA
3. クラス担任のオフィスアワー
4. 履修相談会 MANAVI の実施報告
5. H21年度第1学期一般教育演習(フレッシュマンセミナー)・外国語演習の抽選結果及び初習外国語選択者数
6. H20年度初習外国語II オンライン授業の報告
7. 授業アンケートにおける学生の自習時間等

小委員会等の構成

各委員が次のように決まりました。

○小委員会委員

(理学部) 小野寺彰 委員長・センター長補佐

(教育学部) 小内 透 センター長補佐

(メディア・コミュニケーション研究院)

竹中のぞみ センター長補佐

(高等教育開発研究部)

安藤 厚 センター長補佐

文学部 砂田 徹

経済学部 岡部洋實

歯学部 横山敦郎

農学部 秋元信一

先端生命 山口淳二

外国語教育センター 寺田龍男

○全学教育科目における不正行為について担当する委員

法学部 白取祐司

薬学部 松田 正

○附属図書館北分館委員会委員

メディア・コミュニケーション研究院

河合 靖

工学部 千歩 修

H21年度全学教育委員会の検討事項

H21年度に全学教育委員会で検討する事項を議論しました。この報告の最後にまとめてあります。

新教育課程の中間評価報告書の作成

H18年度に導入した新教育課程が本年度で4年目を迎えることから、科目責任者等を中心に中間評価を行い、報告書を作成することが了承されました。

H20年度第2学期のGPA

学期GPAの全学平均は前年度2学期に比べ0.04上昇し、通算GPAも+0.03と着実に上昇しています。上限設定により、履修科目に集中して学習している効果と考えられます。各学部の平均値、GPA分布グラフを利用した修学指導が望まれます。

クラス担任のオフィスアワー

学生の学習・生活上の相談のため、クラス担任にオフィスアワー、クラスアワーの設定をお願いしています。メンタルヘルスなどで問題が見られた場合は学生相談室、保健管理センターと早めに連携をお願いします。

履修相談会 MANAVI の実施報告

上級生による修学サポート・履修相談会 MANAVI が今年も実施されました。参加者は1,931名、入学者の75.5%で、昨年より12%増えています。アンケートでは、修学上の不安を解消するのに役立ったとの答が多く寄せられています。

抽選科目の開講中止・初習外国語の履修者数

H21年度1学期の抽選科目で、履修者が3名以

下のため開講中止となった科目は、一般教育演習(フレッシュマンセミナー) 7 (開講予定 79) 科目、英語演習 14 (初級 2, 中級 9, 上級 3; 開講予定 92) 科目, その他の外国語演習 9 (開講予定 81) 科目でした。初習外国語では、スペイン語の履修希望者が 305 (昨年は 290) 名で、抽選により 237 名が履修できることとなりました。

H20 年度初習外国語 II オンライン授業報告

H20 年度 2 学期から独, 仏, 露, 中国語で CALL 授業を導入しています。最新のメディアの利用や TA の活用が図られ、アンケートでも「役立った」という学生が約 6 割と、おおむね好評でした。

授業アンケートによる学生の自習時間調査

H20 年度 1 学期までの授業アンケートにおける学生の自習時間の調査結果がまとまりました。90 分の授業 1 回のための自習時間は、H20 年度 1 学期には全体で 1.17 時間と、H18 年度より約 10% 増えています。特に専門科目・講義では、1.16 時間と 20% 近く延びています。これは 1 年次の履修登録上限設定、GPA、授業改善と予習・復習の指導など、全学教育における取り組みが高年次までよい影響を与えていると考えられます。専門科目の学部別の分析もありますので、各学部の修学指導、FD 等の参考にしてください。

平成 21 年度 全学教育委員会の検討事項

1. 中期目標・中期計画の実施状況について (最終年度計画の関係各項目の着実な達成)
 - 1) H 18 以降の新教育課程の実施状況の検証・中間評価 (報告書の作成) (H 21)
 - (1) 一般教育演習 (フレッシュマンセミナー)・総合科目 (導入科目見直し)
 - (2) 主題別科目, 共通科目
 - (3) 外国語科目・外国語演習
 - * 今後の外国語教育の在り方について (最終報告) (H 18.5) に基づく改善
 - スペイン語・韓国語, 初習外国語の CALL オンライン授業, 英語 IV のクラス編成・履修調整の見直し, 履修者 3 名以下の外国語演習の開講中止 (H 21), 外国語特別演習の充実 (アジア系言語), 英語単位優秀認定制度の改善 (対象年次の見直し)
 - (4) 基礎科目 (文系基礎科目, 理系基礎科目, 自然科学実験)

- (5) 互換性科目
- (6) キャリア科目の充実
- (7) 統一教科書の拡充
- 2) その他の検討事項
 - (1) 初習外国語の選択システムの見直し
 - (2) コアカリキュラムの検証 (倫理科目, 工学的創成実験, 芸術科目, 総合科目等) 及び新科目の開発 (チャレンジ科目, サービスラーニング (社会・地域・国際体験型科目), 博物館「教育 G P」関連科目)
 - (3) 大学間連携 (自然科学実験, 芸術科目, キャンパス・コンソーシアム函館提供科目等)
 - (4) 芸術科目の充実・支援
 - (5) 外国語による全学教育科目の拡充 (英語による授業のみで学位取得が可能なシステムの形成を含む)

2. 単位の実質化・授業改善について

- (1) 成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施
 - ① 成績評価基準の設定: ガイドラインの学内公開
 - ② 成績評価基準の明示
 - ③ 成績評価結果の公表
 - ④ 成績評価の妥当性の検討: 問合せへの回答に対するコメント
 - ⑤ 学生からの成績評価に関する申立て制度の導入 (H 21)
 - ⑥ 授業への出席等に関する具体的な統一基準, 出席調査の徹底 (IC カード), 休講・補講の状況のデータ調査
- (2) 「秀」評価及び GPA 制度・履修登録単位数の上限設定制度の検証・改善
 - * 自由設計科目制度の導入 (H 21)
- (3) 単位制度の実質化: 総合科目の単位数の変更 (H 21), その他の科目の単位数の見直し
- (4) 学期末試験を含めた授業期間 (16 週) の運用状況
- (5) 自習時間・GPA・履修単位数の調査・検証
- (6) 単位の実質化 (自習支援) を進める授業改善・FD の充実
 - * クリッカーを利用した双方向型授業の普及 (H 21)
 - * 「学習支援室」の設置
 - * I T 活用の FD (FD Bulletin, 「教員支援」H P のリンクの拡大)
 - * 全学教育担当教員の FD
- (7) シラバスの改善 (内容・項目の充実)
 - * 記入状況の点検 (「到達目標」, 新項目「準備学修 (予習・復習) 等の内容と分量」等)
 - * シラバス・コンクール (仮称): 全学教育・各学部・大学院の平成 21 年度シラバスを点検し, 模範となるようなシラバスを選定して公表
 - * 英文シラバスの拡充
- (8) TA の活用, TA 研修の充実
 - * 留学生 TA の増加
 - * TA 研修修了率の向上, TA マニュアルの改善 (H 23)

- * T A 研修・業務のデータベース化, アカデミックキャリアとしての「T A の資格化」(修了証, 認定証の発行), T A 研修参加者への日当支給
 * 次世代T A 研修プログラムの開発
- (9) 全学教育における授業公開制度, O C W を活用した授業公開
- (10) 4 セメスター制の導入, 授業時間の見直し (90 分→60 分/120 分)
3. 全学教育科目の充実について
- (1) 履修調整結果, 開講時間帯, 翌期再履修クラスの検証
- (2) 既修得単位認定における科目等の見直し
4. 全学教育支援体制の強化について
- (1) 科目責任者会議, 責任部局における運営組織の確立
- (2) 責任部局の「責任コマ数」, 「全学支援」, 「全学協力」の実施状況
- (3) 責任部局の在り方
5. 非常勤講師・特任教員について
- (1) 全学運用定員解消計画 (外国語, その他)
- (2) 非常勤講師削減 (H 22 年度以降の計画)
- (3) 退職教員に関する承認事項・申合せの見直し (H 22 年度以降)
- (4) 特任教員 (外国人教師) の在り方
6. 新教育課程の実施に伴う教務情報システム・教務事務体制に係る改善事項について
- (1) 自由設計科目制度への対応
- (2) 事前履修調整 (抽選), 履修取消し, 成績確認のオンライン化 (H 21)
- (3) T A の資格化のための学生個人データベース
- (4) シラバスの運用状況の検証
- (5) 授業公開制度支援システムの導入
- (6) 教務情報システム上での「アンケート」システムの導入
- (7) シラバスのペーパーレス化
- (8) 全学教育部 HP の更新
7. 施設・設備の充実について
- (1) 視聴覚機材 (資料提示装置等) の整備
- (2) 理科基礎科目パイロット授業・自然科学実験のための施設・設備の充実
- (3) C A L L オンライン用授業設備の充実
- (4) シアターコンプレックスの拡充
8. 履修指導について
- (1) 組織的な履修指導
- (2) 履修相談会 M A N A V I, ピアサポート
- (3) G P A を用いた修学指導
9. クラス担任制度の強化について (教育改革室・学生委員会と連携)
- (1) 「北海道大学基礎クラス担任制度に関する要項」の整備 (H 21)
- (2) 個別指導 (オフィスアワー)
- (3) クラスアワー年 4 回・クラス担任会議 (学生支援 F D) 年 2 回開催 (H 21)
- (4) 全学教育の授業を 3～4 回連続して欠席した学生について, 授業担当教員からクラス担任に連絡して指導を行う制度の実質化
- (5) 学修簿を連帯保証人へ送付を開始 (H 21)
- (6) クラス担任 (学生支援) マニュアルの整備 (冊子として刊行) (H 22)
10. 高大連携授業の今後の在り方について
 * 高校生の全学教育科目聴講に関する要項等の作成 (H 21)
11. 各種アンケート調査結果の活用について
 授業アンケート, 学生生活実態調査, 単位の実質化に関するアンケート, T A アンケート, コアカリキュラムアンケート, 卒業生アンケート, 4 大学学生調査等の継続・活用
12. 平成 19 年度以降の G P A ・上限設定・成績評価, カリキュラム, F D 等の改善策について (最終報告) (H 19. 3) に基づく充実・改善について
- (1) 高年次履修の時間帯の確保 (くさび型履修の促進)
- (2) 外国語演習を大学院学生が正規の授業科目として履修できる仕組み
- (3) ELMS を活用した統合的な学生支援システム (授業紹介, 授業支援, クラスの連絡)
- (4) アカデミックアドバイザー制度, 学生への個別指導のシステム (アドバイザー・アドバイザー制度) の整備
13. 第二期 (平成 22 年度～平成 27 年度) 中期目標・中期計画関連事項 (教育改革室)
14. 学生編成・学生募集単位の改定関連事項 (教育改革室)
15. 教育 G P 等への応募の促進・支援

* 下線は H21 年度の重点項目

(小野寺彰 理学研究院教授・センター長補佐)

全学教育 TA 研修会を開催

—192 名に修了認定—

本年度の全学教育 TA 研修会が、4月6日(月)にセンター大講堂を主会場として開催されました。全学教育を担当する TA に対しては、当該授業科目の担当教員によるオリエンテーションのほかに、事前にこのオリエンテーションを受けることが義務づけられています。本センターでは、平成10年度から TA 研修会を実施してきて、今回で12回目を迎えました。今年度の全学教育における TA 採用人数はのべ857名(前年度比6%増)、のべ時間は3万1224時間で2%増加しています。

TA 制度は広い意味の大学院教育の一環として導入され、大学教員となるための実地訓練(教育現場の体験)にもなります。大学院学生は教員とともに学部教育に参加することによって、自分の専門につ

いてより一層理解を深めるとともに、教育の現場において教えることの意義を理解できます。

研修の目的は以下のように要約されます。

- 1) 大学教育の基礎を理解する
- 2) 全学教育の趣旨を理解する：目的、意義、全体での位置づけ
- 3) 専門教育に還元できない基礎的な教育技術、心構え、教育理論について理解する
- 4) 担当する科目の内容と教授法を理解する
- 5) TA 相互の交流をはかる

午後の分科会の種類は昨年同様13で、参加者は192名でした。受講者は例年同様、真剣に研修に取り組んでいました。(細川敏幸)

表1 平成21年度北海道大学全学教育 TA 研修プログラム

| | |
|--|--------------------------|
| ○午前の部(大講堂) | |
| 9:30 | 佐伯 浩 総長挨拶 |
| 9:35 | 講演「北海道大学の全学教育について」(安藤 厚) |
| 10:05 | 講演「TA の心得」(瀬名波栄潤) |
| | 休憩(10分) |
| 10:45 | TA 業務に関する事務処理の内容(馬淵奈美) |
| 11:00 | パネル討論(司会：細川敏幸)(写真1) |
| | 教員パネラー：和田博美、栗原正仁 |
| | 院生パネラー：舩田佳弘、田島沙羅 |
| | 昼休み |
| 12:00 | コーヒープレイク(担当：舩田佳弘、田島沙羅) |
| ○午後の部(分科会に分かれて行う)(基本的には13:30～16:00)(写真2) | |
| (A) | 一般教育演習 |
| (B) | 一般教育演習/フィールド |
| (C) | 講義 |
| (D) | 論文指導 |
| (E) | 情報学 |
| (F) | 英語II オンライン授業 |
| (G) | 英語II 以外の英語の授業 |
| (H) | 初習外国語(中国語以外) |
| (I) | 中国語 |
| (J) | 文系基礎科目 |
| (K) | 心理学実験 |
| (L) | 理系基礎科目 |
| (M) | 自然科学実験 |

分科会の報告

一般教育演習および一般教育演習／フィールド

分科会 A (一般教育演習) と B (一般教育演習／フィールド) の合同分科会は、参加者 10 名で行われました。アイスブレイキングでは、「授業の最初に打ち解けあう」ことの重要性を認識しました。「少人数授業での TA の役割 — ケーススタディから何を学ぶか — 」というテーマで、様々な事例に対する TA の振舞いをグループで学習して、発表と質疑応答を行いました。全体を通して、「教員とのコミュニケーション」と「学生をよく見ること」の重要性を認識しました。

講義

まず大講堂で、教務課の馬淵さんが講義の TA が知っておくべき AV 機器の操作方法について説明しました。次に細川が、講義に関して留意すべきこととグループ学習の基礎を、マニュアルを用いて解説しました。この分科会では参加者を 8 グループに分け、4 グループずつが教室 N282, N283 に入り、細川、山田と池田、三上がそれぞれを担当してグループ学習を行いました。まずアイスブレイキングとして自己紹介と役割分担を決め、「使い終わった割り箸の使い方」を 5 分間で考えて発表してもらいました。グループ学習では、「必ずレポートの提出が遅れる学生がいる」など 4 つのケーススタディについて解決策を話し合い、発表しました。昨年同様各グ

ループは熱心に課題に取り組み、場合分けにより多くの解決策が提示され、有意義な発表となりました。

論文指導

この分科会では、論文指導における TA の役割の概略を説明した後、「論文の型」と「評価基準」についてグループ・ワークを交えて説明しました。

「論文の型」では、論文とは①問い、②主張、③論証の 3 つを含む、I. 序論、II. 本論、III. 結論の型をもった文章であることをまず確認し、序論、本論、結論それぞれの内部構成について説明しました。ついで、レポートの実例を基に、それが論文の型にどのようなはまっているかをグループ・ワークで検討しました。「論文の評価基準」では、標準的な評価ポイントについて説明し、特に剽窃、パラグラフライティングについて解説しました。

30 名の受講者はグループワークにもまじめに取り組み、論文指導の概略は掴んでくれたと思います。

情報学

情報教育館 2 階のコンピュータ室 (A, B, C) で、情報学 I の目標と授業内容、指導体制、授業で用いる教材、成績評価の概略と具体的な評価項目等の説明を行いました。その後、情報学の TA に必須の、情報基盤センターの教育情報システムを使った授業課題の設定方法について研修を行いました。

また、情報学では初回のガイダンス時に担当教員からの説明があった後、すぐにコンピュータ教室に移動し、授業開始となります。1 つの講時で最大

12グループほどが並列して授業が進行しますので、スムーズに学生を誘導する必要があります。研修会で、その流れをつかんでいただきました。

情報学では約50名のTAの協力で、学生20人に担当を一人置く体制で指導を行いますので、全員が主体的に授業に関わっていただく必要があります。更に、全体研修会後には、各講時で授業全体を統括する、タイプSのTAとの打ち合わせも行いました。このTA群のリーダーとなるTAには、自分たちで質問対応の各担当を決めるなど、主体的に打ち合わせていただきました。このように、TA研修会分科会（情報学）では、全学2,600人が履修する情報学を進めるにあたって大変有意義な研修会となりました。なお、本分科会は、大学院共通授業科目「情報学教育特論」の講義も兼ねています。

英語Ⅱオンライン授業

当分科会では、英語Ⅱオンライン授業が行われる3つのタイプの教室のCALLシステムの特徴の説明と、教材を提供する主たるソフトウェアであるWebTubeの操作方法についての簡単な実習を行いました。その後で情報教育館CALL教室、メディアコミュニケーション研究院210CALL教室に移動して、それぞれの教室のCALLシステムの特徴を説明しました。分科会の出席者は14名でした。

英語Ⅱ以外の英語の授業

当分科会への今年度の参加者は8名でした。TAマニュアルと分科会で配布した資料を見ながら、英語のTA業務の基本事項やスケジュール、今後の連絡等について確認しました。最後にTA業務に関わる場所として、国際広報メディア・観光学院CALL教室・全学教育事務部・全学スタッフ室（閉鎖期間のため、入り口のみ）およびS教員棟コピー室に足を運び、出勤簿の場所、CALL教室・普通教室の教卓の鍵・備品・場所と借りるための手続き、そしてコピー機使用の手続きについて、実物を見ながら確認しました。終了は予定を少々過ぎてしまいましたが、全員最後まで参加し、解散となりました。

初習外国語（中国語以外）

今年度の参加者は3名でした。しかし例年通り、ネイティブ・スピーカーの留学生、同じく自分の専

門分野の知識を生かすことが期待されている院生、逆に語学力ではなく、CALL授業の円滑な運営を行うために採用された院生というように、それぞれタイプの異なるTAたちが集まりました。そこで研修内容は次の3点としました。

- ・午前中に行われた研修についての再確認と意見交換
 - ・自分に期待されている役割の再確認
 - ・疑問点、不安に思っている点についての検討
- 幸い今年度もやる気に溢れたTAを採用できました。なお、第2学期の初習外国語CALL授業のTAには、学期前に再度研修会を実施する予定です。

中国語

中国語TAはほとんどがネイティブの留学生で、各部局から募集します。採用時には面接を行い、TAの業務内容を理解してもらっています。当分科会では午前の全体研修を総括しながら特に中国語TAとしてのポイントを再確認しました。

授業を受ける日本人学生にとってTAは初めて身近に接する中国人となることが多いようです。留学生にとってはTAの仕事を通して日本の学生に自分の国を知ってもらう機会なので、そうした意識を持って取り組んで欲しい旨強調しました。

就職活動でやむを得ない欠席もありましたが、19名出席しました。

文系基礎科目

4人の参加をえて、まず教養教育とはいかなるものであるかの共通の理解を得ました。教養教育が育成をめざすGeneralistとは何であり、いかなる能力を備えた者であるかを古典ギリシア以来の歴史的経緯を踏まえ講義し、その後質疑応答が行われました。さらに、人文科学と社会科学の関連と相違について確認しました。TAの心構えとして、受講生が集中しやすい環境の形成につとめること、そして具体的なケースに応じて対応を話し合いました。たとえば、出席をとらない授業でレポートを授業の途中で提出し、講師に何も言わずに、音をたてて退出したケースについて、どのように対応するかを議論しました。あるTAは他の学生との公平な対応に配慮しつつ、感情的にならずに提出レポートの内容をまず吟味すべきとの意見を提示しました。TAの役割

各部署の授業担当状況

折り込み

2009.2.27 現在

| 非 | 外(旧言語) | | 地球研 | | 低温研 | | 電子研 | 遺制研 | 触媒研 | スラブ研 | 情基 | 留セタ | 高等 | 創成 | 博物館 | | 北方 | 公共 | 先端研 | | 観光 | アイヌ | 計 | | | | | |
|---|--------|---|-----|---|-----|---|-----|-----|-----|------|----|-----|----|----|-----|---|----|----|-----|---|----|-----|---|-----|----|---|-----|----|
| | 専 | 外 | 専 | 非 | 専 | 非 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 非 | 専 | 専 | 専 | 非 | 専 | 専 | 専 | 専 | 外 | 非 | 総計 | |
| | | | 5 | | 1 | | 1 | | 2 | | | | | | | 2 | | 2 | | | | | | | 25 | 0 | 0 | 25 |
| | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 15 | 0 | 0 | 15 | |
| | 1 | | | | | | | | | 1 | 1 | | 0 | | | | | 1 | | | | 2 | 1 | 12 | 0 | 0 | 12 | |
| | | | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | | | | | | 3 | 0 | 0 | 3 | |
| | | | 1 | | 1 | 1 | | | | | 3 | 1 | 5 | | 2 | | 8 | | | | | | | 52 | 0 | 2 | 54 | |
| | 7 | | 3 | | 1 | 0 | 2 | 2 | 1 | | | 3 | 1 | | | | 2 | 2 | | | | | | 84 | 0 | 2 | 86 | |
| | | | | | | 1 | | | | | | | | 電よ | 排 | | | | | | | | | 14 | 0 | 2 | 16 | |
| | | | | | | | | | | | | 3 | | | | | | 1 | | | | | | 9 | 0 | 0 | 9 | |
| 0 | 8 | 0 | 0 | 9 | 0 | 2 | 1 | 3 | 3 | 4 | 2 | 4 | 7 | 9 | 1 | 4 | 0 | 13 | 3 | 0 | 0 | 2 | 1 | 214 | 0 | 6 | 220 | |

| 72 | 外(旧言語) | | 地球研 | | 低温研 | | 電子研 | 遺制研 | 触媒研 | スラブ研 | 情基 | 留セタ | 高等 | 創成 | 博物館 | | 北方 | 公共 | 先端研 | | 観光 | アイヌ | 計 | | | | |
|-------|--------|--------|-------|---|--------|---|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-----|-------|-------|-------|-----|---|-------|-------|-------|---|---|---|--------|
| | 専 | 外 | 専 | 非 | 専 | 非 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 専 | 非 | 専 | 専 | 専 | 非 | 専 | 専 | 専 | 専 | 外 | 非 | 総計 |
| 11 | | 67 | 50 | | 29 | | 28 | 23 | 11 | 11 | 12 | 10 | 9 | 9 | | 6 | 29 | 19 | | | 26 | 4 | 1 | | | | 1402 |
| 0.15 | | 595 | 99 | | 5 | | 10 | 5 | 6 | 2 | 29 | 16 | 13 | 19 | | 6 | 13 | 5 | | | 4 | 4 | 1 | | | | 1626 |
| 11 | | 8.88 | 1.98 | | 0.17 | | 0.36 | 0.22 | 0.55 | 0.18 | 2.42 | 1.60 | 1.44 | 2.11 | | 1.00 | 0.45 | 0.26 | | | 0.15 | 1.00 | 1.00 | | | | 1.16 |
| 0 | | 844 | 99 | | 6 | | 10 | 5 | 6 | 2 | 29 | 16 | 13 | 21 | | 6 | 13 | 5 | | | 4 | 4 | 1 | | | | 2069 |
| 0.00% | | 249 | 0 | | 1 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | | 0 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | | | | 443.0 |
| | | 29.50% | 0.00% | | 16.67% | | 0.00% | 0.00% | 0.00% | 0.00% | 0.00% | 0.00% | 0.00% | 0.00% | | 0.00% | 0.00% | 0.00% | | | 0.00% | 0.00% | 0.00% | | | | 21.41% |

総合センター、保健管理センター分は医学部に算入。機器分析センター分は薬学部に算入。量子集積エレクトロニクス研究センター、エネルギー変換マテリアル研究センター分は工学部に算入。

実技・外国語科目(表2)10コマの開講責任を負う。

つき1コマを提供することとしている。またその内訳については「一般教育演習」を8割、「外国語演習」を2割とする。

として、退出学生に対し口頭で注意することについては同意できました。活発な議論がされた1時間ほどの研修でした。

心理学実験

今年の心理学実験分科会には4名の院生が参加し、2時間にわたって研修を実施しました。はじめにTAの心構え、実験授業におけるTAの役割に関するレクチャーを行い、どのような仕事を行うのか説明しました。その後、個人情報を含む実験データの取り扱いや、受講生に心理検査の結果をどのようにフィードバックすべきかなど、心理学実験に特有の問題について議論しました。最後に全体討論を行いました。すなわち授業中に起こりうる場面を想定し、TAとしてどのように対応したらよいか討論が行われました。受講生は、心理学実験に特有の事情を理解し、TAとしての自覚や責任感を高めることができたと思います。

理系基礎科目

出席者は理学院の大学院生25人程度で演習室がほぼ一杯となったためミニレクチャーのみを行いました。TAの心得に関しては、前の時間にたくさん話を聞いているようなので短い話をしました。理学院の院生が集まったせっかくの機会なのでキャリアパスというテーマで話しました。

1. TAの役割と意義：

- (i) 教員と有機的に連絡をとること
- (ii) 授業を教員側に立って見ること
- (iii) 専門知識を伝授することの難しさと面白さ
報酬は少ないが有意義な経験となるようにと激励しました。

2. 理系の専門職に就くために心がけること：

- (i) テーマを考える、研究する際に
- (ii) 論文を書く、発表する際に
- (iii) 就職する、指導者になる際に
どの研究分野も総合的な能力を要すること、失敗を含めて経験はすべて後に生かせる可能性があることを付け加えて激励しました。

自然科学実験

13:30～14:15にセンターN302室において、自然科学実験TA研修会共通プログラムの講習会を行いました。講習内容は以下の4項目です。

- (1) 自然科学実験の概要
- (2) 自然科学実験TAとしての仕事
- (3) 自然科学実験TAの一般的な心構え
- (4) 一般的な安全上の注意点

引き続き14:15から、カテゴリー別プログラムとして、物理、化学、生物、地学の各実験室に分かれ、各担当教員が具体的な実習内容および注意点に関する講習を行いました。

「外部評価委員会の記録」を刊行

高等教育機能開発総合センターでは、2月12日に、5人の委員からなる外部評価委員会（委員長＝池田輝政・名城大学副学長）による外部評価を受け、同委員会の記録を取りまとめた報告書『高等教育機能開発総合センター 外部評価委員会の記録 2002～2006年度』をこのほど刊行しました。

今回の外部評価では、平成14～18年度の5年間のセンターの活動について、平成20年3月に本センターが作成した『点検評価報告書 2002～2006年度』の内容に沿って、評価していただきました。

今回刊行した『外部評価委員会の記録』はA4判52ページで、2月に行われた外部評価委員会の議事内容に沿って、センター全体の管理運営および全学教育部・3研究部に関して、脇田稔センター長をはじめとするセンター側からの活動報告と自己評価、それに対する外部評価委員の方々からの率直な質疑やコメントなどを収録しています。

『外部評価委員会の記録』は、すでに学内外に広く配布されています。ぜひご一読ください。

(三上直之)

ヨーロッパにおけるダブルディグリー制度

前高等教育機能開発総合センター長補佐 大野 公裕

今年の1月11日から16日まで、ドイツのミュンヘンにあるルートヴィヒ・マクシミリアン大学(LMU)とスイスのチューリッヒにあるスイス連邦工科大学(ETH)を訪問し、留学制度に関する調査を行いました。目的は、エラスムス・ムンドゥス計画、ダブルディグリー・プログラム、ECTS(European Credit Transfer and Accumulation System)と呼ばれる単位互換制度などの実態について両大学の事務担当者や教授から話を伺うことです。

現在、我が国の大学は、質の高い大学院教育の提供、大学院教育の国際的な通用性と信頼性の向上を図ることが求められています(「新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—」平成17年9月中央教育審議会答申)。北大でも次期中期目標・中期計画(原案)において「教育の国際的な通用性を向上させ、学生の国際的流動性を高める」という目標が掲げられ、この目標を達成する措置の一つとして、「国際的に通用する単位互換制度を構築する」ことがあげられています。

一方、ヨーロッパでは高等教育機関における教育制度を共通化するボローニャ・プロセスと呼ばれる枠組みが1999年に打ち出され、そのもとで学術交流の活発化に向けた取り組みが行われてきました。上述のエラスムス・ムンドゥス計画はそのような取り組みの一つであり、特にヨーロッパの大学が提供する優れた修士課程プログラムを支援し、ヨーロッパ内外における留学生や研究者の交流を促進することを目指して、その予算の90%は人材交流のための奨学金に当てられています。

こうした取り組みを実施するためには、大学間で共通の単位制度が必要です。これがECTSと呼ばれる単位互換制度です。ここでは学士課程を含めた学生の1年間の学習量を1500～1800時間、1年間に修得すべき単位を60ECTSと定めていて、1ECTSは25～30時間となります。学習量には、講義・演習などの授業時間のほかに、学生自身による自習や試験準備などの学習時間が含まれます。

これを日本の大学と比べると、例えば北大の場合、

修士課程では2年間で30単位以上修得し、1単位の学習量は45時間と定められているので、1年間の(平均)学習量は15単位×45時間=675時間で、ヨーロッパの大学の半分以下ということになります。

ヨーロッパの大学の場合は、卒論や修論も単位化されていますが(LMUの場合、卒論が6～12ECTS、修論が15～30ECTS)、それを差し引いてもほぼ倍の学習量です。訪問先の両大学では、一般的に各学期に30ECTSを割り当て、それを元に授業科目を配分しています。1科目に与えた単位数(学習量)が適切かどうかは、学期末に学生にアンケートを実施して判断しているということでした。

ダブルディグリー・プログラムでは通常、2年間で2つの大学で所定の単位を取得し、両大学から学位を授与されますが、訪問先の両大学では、3つの大学から学位を授与されるトリプルディグリー・プログラムも実施しています。例えば、ETHのIDEA Leagueと呼ばれる応用地球物理学のプログラムでは、デルフト工科大学(オランダ)、ETH、アーヘン工科大学(ドイツ)でそれぞれほぼ半期ずつ過ごし、最後の8ヶ月間でいずれかの大学または産業界で修士論文を執筆します。これらのプログラムでは、授業は基本的に英語で行われます。参加学生は少数ですが、学生にとっては異なる環境への適応力が身に付き、大学としても、キャンパスの国際化が進み、大学の知名度が上がり、教授どうしの交流も活発になるというメリットがあるということでした。

以上のようなヨーロッパにおける状況を踏まえて、北大は今後とるべき道を模索しなければなりません。その際、留学生への奨学金や宿舎の問題などのほか、北大ではアジアからの留学生が多いことから、アジア地域の大学との交流を視野に入れて「国際的に通用する単位互換制度」をどのように構築す

るかが最大の問題になるでしょう。現在国際交流室、教育改革室を中心にその検討が進められています。

(メディア・コミュニケーション研究院 教授)

筑波大学と教育改善に関する協定を締結

去る3月30日(月)、本学と筑波大学は、両大学の教育活動を活発にし、教育の質をさらに高めるために、「教育改善に関する協定」を締結しました。

この協定に基づき、本学はこれまでのFD活動の実績・成果を、筑波大学は現在進行中の教育GPの成果を相互に紹介し、活用することにより、両大学における教育改善の推進と、教育の質の向上が期待されます。

主な活動内容は以下の通りです。

- ①カリキュラム改善、授業方法の向上、単位の実質化と成績評価の厳格化等に関するFD (Faculty Development) 活動の改善
- ②教育改善に関するシンポジウム等の実施

③人材育成プログラム(教育プロジェクト)等の企画・立案

今後の具体的な取り組みとしては、今年7月27日～31日に両大学共催の国際ワークショップ及びシンポジウムを開催し、その中で本学はTA研修を含む次世代型FD、筑波大学は教養教育とTA研修に力点を置いた教育改革を担当して、全体として大学教育改革の現状とそのための研修の在り方を明らかにする予定です。

この国際ワークショップ及びシンポジウムには国内外から10名の有識者を招き、今後の我が国の教育改革に先導的役割を果たすことが期待されます。

(安藤 厚)

写真1 協定調印式で握手を交わす筑波大学工藤教育担当副学長(左)と本学脇田教育担当副学長(右)

筑波大学・北海道大学共催国際シンポジウムを開催

7月27日(月)～31日(金)

筑波大学との教育改善に関する協定に基づき、7月27日～31日につくば市と札幌市(北大)で両大学共催の国際ワークショップ及びシンポジウム《高等教育におけるプロフェッショナル・ディベロップメント》を開催します。ここには、FD, TA 研修, 学生調査等において先進的な実績をもつ方々をお招きして、それぞれの活動を紹介していただきます。

大学設置基準等の改正により教員研修が義務化さ

れ、中教審・学士課程教育答申(平成20年12月)等により教育の質保証が強く求められているおりから、教育の質の向上を目指す研修をはじめ、さまざまな最新の取り組みが紹介されます。

学内、全国からたくさんの方が参加され、多くの成果が得られることを期待しています。

http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/kokusai_sinpo.html (安藤 厚)

2009年度 筑波大学・北海道大学共催国際シンポジウム 《高等教育におけるプロフェッショナル・ディベロップメント》

日本でFDの取り組みがはじまってから約10年になります。大学設置基準の改正によりFDが「義務化」されたため、この1～2年はどこの大学でもFDが推進されていますが、その内容・形式はまだ手探り状態です。

今回は、10年前からFDに取り組んできた北海道大学と筑波大学が共同してシンポジウムとワークショップを企画し、北米と東アジアにおける教育に関する新しい教員研修の在り方を探ります。

FD(ファカルティ・ディベロップメント)という用語自体、北米では最近あまり使用されていないこともあり、ここではカリキュラム改革、授業コンサルティング、ティーチング・ポートフォリオ等の新しい取り組みも含み、職員研修やTA研修をも包括する概念として、PD(プロフェッショナル・ディベロップメント)という用語を使い、まず各国の現状をお互いに理解するところからはじめたいと思います。

講師紹介

リンダ・フォンヘーネ(カリフォルニア大学バークレー校 Graduate Student Instructor ティーチング・リソースセンター長)
 サブリナ・ソラッコ(カリフォルニア大学バークレー校大学院アカデミックサービス部長)
 リン・テイラー(ダルハウジー大学学習・ティーチングセンター長)
 パメラ・ヴォーグ(サンフランシスコ州立大学ティーチング・ファカルティディベロップメントセンター長)
 ジュディス・アン・オーミット(インディアナ大学副学長(学士課程教育担当) 補佐)
 ジョディ・D・ナイキスト(ワシントン大学教育開発研究(名誉)センター長)
 シンファン(清華大学教育研究所所長)
 イヘジュン(ソウル国立大学ティーチング・学習センター eLearning サポート部長)
 石田 東生(筑波大学教育企画室長, システム情報工学研究科)
 宮本陽一郎(筑波大学人文社会科学研究科)
 細川 敏幸(北海道大学高等教育機能開発総合センター)
 山岸みどり(北海道大学高等教育機能開発総合センター)
 瀬名波栄潤(北海道大学文学研究科)
 宇田川拓雄(北海道教育大学函館校)
 山田 礼子(同志社大学社会学研究科)

(プログラム A in つくば) ◇会場◇ つくば国際会議場
 国際ワークショップ「若手研究者のためのプロフェッショナル・ディベロップメント」
 Professional Development for Young Scholars

7月27日(月) 10:00～16:00

【第一部】リンダ・フォンヘーネ / サブリナ・ソラッコ「バークレー校における先進的な PFF プログラム」

【第二部】

ワークショップ① リンダ・フォンヘーネ「TAを活用した成績評価基準の作り方と使い方」

ワークショップ② サブリナ・ソラッコ「研究成果を発信するためのアカデミック・ライティング実践」

国際シンポジウム「教養教育・初年次教育のための先進的 PD の試み」
New Approaches to General Education and Professional Development

7月28日(火) 13:30～17:30

講演

- 1) リンダ・フォンヘーネ「TAを活用した授業方法に関する教員セミナー」
- 2) サブリナ・ソラッコ「将来の教員のためのアカデミック・ライティング」
- 3) イヘジュン「高等教育において質の高い混合型e-ラーニングを実現するための研修システムの開発」
- 4) 山田 礼子「日本における初年次教育の展開～その発展過程と現状の課題～」
- 5) 石田 東生「筑波大学における教養教育の再構築」

パネルディスカッション

(プログラム B in 札幌) ◇会場◇ 北海道大学情報教育館
国際シンポジウム「プロフェッショナル・ディベロップメントの諸相」
Aspects of Professional Development

7月30日(木) 9:00～16:00

セッション1：高等教育におけるPD～カナダと米国の事例～

講演1-1 リン・テイラー「研究大学におけるGTA (Graduate Teaching Assistant) 訓練～ダルハウジー大学の例～」

講演1-2 パメラ・ヴォーグ「サンフランシスコ州立大学の新採用教員研修」

講演1-3 細川 敏幸「北海道大学の新任教員研修, FD, TA 研修」

セッション2：高等教育におけるPD～中国と韓国の事例～

講演2-1 シジンファン「清華大学のPD戦略」

講演2-2 イヘジュン「ファカルティディベロップメントとティーチングの質～ソウル国立大学の例～」

講演2-3 宇田川拓雄「日本の大学のティーチングセンターとPD」

7月31日(金) 9:00～16:00

セッション3：PDの手法1

講演3-1 ジュディス・アン・オーミット「NSSE～教育改善のためのアンケートシステム～」

講演3-2 山田 礼子「同志社大学の学生調査JFS(新入生調査)とJCSS(上級生調査)」

講演3-3 ジョディ・D・ナイキスト「ワシントン大学におけるマイクロティーチング」

講演3-4 山岸みどり「日本の大学における授業開発コンサルタント(Instructional Consultants)の課題」

セッション4：PDの手法2

講演4-1 リンダ・フォンヘーネ「バークレー校のPFF(大学教員候補養成研修)」

講演4-2 宇田川拓雄「日本における大学教授養成」

講演4-3 サブリナ・ソラッコ「アカデミックサービス～バークレー校の大学院生向けアカデミック・ライティング～」

ディスカッサント 宮本陽一郎・瀬名波栄潤「日米のアカデミック・ライティング」

* プログラムは全て英語で行われます。

筑波大学国際シンポジウム：日本語による概要配布予定

北海道大学国際シンポジウム：通訳あり

参加申し込み・お問い合わせ先

高等教育開発研究部

TEL：011-706-7520, FAX：011-706-7521(直通)

Email：presiden@high.hokudai.ac.jp

申し込み期限：7月17日(金)

高等教育 HIGHER EDUCATION

クリッカーをアンケートに活用

ペーパーで行われ、大変な集計作業の後、忘れたころにどこかで結果が公表される。そんなアンケートのイメージをクリッカーが変えてくれました。

クリッカーとは、授業中にパワーポイントで出題されるクイズに学生がリモコンで回答するシステムです。アメリカでは、毎年数百万台売れており、既に認知度の高い授業支援機器です。日本の大学でも、ここ1,2年で急速に普及しつつあります。今回、このクリッカーを2つの大規模な研修会（クラス担任会議、全学教育TA研修会）でアンケートに使用してみました。

クリッカーでアンケートをとることの利点は、紙を消費せず集計も瞬時に済んでしまうという実施側の利便性だけではありません。むしろ、その場で結果を見ることができる回答者側にあります。実際に、クリッカーによるアンケートの時間は、みな興味深々で、笑顔も見られました。

このクリッカーを使用したアンケートには、教員およびTAに、クリッカーの存在を知ってもらうこと、そして、実際に体験して、授業の活性化に威力を発揮することを実感してもらう狙いもあります。

平成21年度から全学教育を対象としてクリッカーの貸出しを開始するため、3月6日には説明会を行い、参加者に実際にクリッカーを体験してもらいました。クリッカーとはどのようなもので、どの

ように使用するのかの講演と、インストールから回答データの書き出しまでの技術的な説明を行いました。参加された方々からは、クリッカーの機能や貸出しについての質問が多数あり、注目度の高さが伺えました。現在、多くの教員がクリッカーを使った授業に挑戦しています。興味のある方は、高等教育開発研究部のホームページをご覧ください。

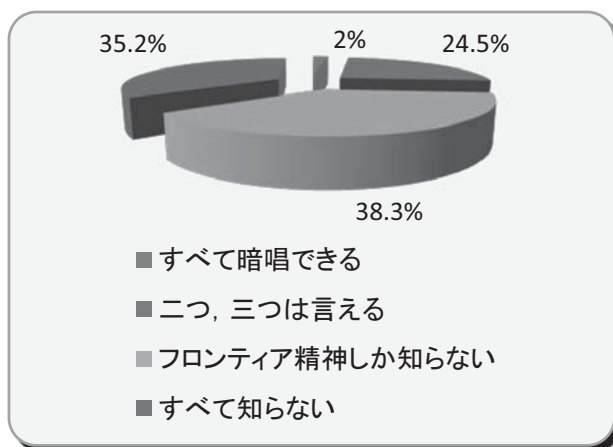
(<http://socyo.high.hokudai.ac.jp/>)

今回のアンケートでは、両研修会とも、10分くらいで5つの質問を行いました。たとえば、クラス担任会議でのアンケートでは、クラス（副）担任は若手の教員が多いのではなく、6割は北大で10年以上勤めているベテランの教員が担当していること、また、全学教育TA研修会でのアンケートでは、北大の4つの理念の中で最も認知度が高い「フロンティア精神」ですら、35%のTAが知らないと回答するなど、意外な結果が明らかになりました。これらは、今後各研修で改善すべきことを浮き彫りにしてくれたと思います。このような、特に興味深いと思われるアンケート結果を表1で紹介します。

一堂に集まってクリッカーを紹介する機会はなかなかありませんが、これからも何かの会議や研修会のときに、アンケートを行いながらクリッカー等の授業支援機器の紹介を行っていこうと思います。

(山田邦雅)

3.) 北大の4つの理念は レスpons



北大に勤めて何年目ですか？

- 1. 1~4年
- 2. 5~9年
- 3. 10年以上

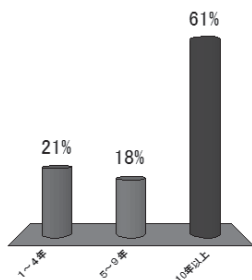


図1 PowerPointのクイズ画面(左)とクリッカーの付属ソフト「TurningPoint」によりExcelに書き出したグラフ(右)

表1 クリッカーによるアンケート結果

| | | | |
|---|-------|---|-------|
| ○クラス担任会議 (平成 21 年 3 月 17 日 参加人数約 65 人) | | ○全学教育 TA 研修会 (平成 21 年 4 月 6 日 参加人数約 195 人) | |
| 北大の 4 つの基本理念で、 新入生に一番知られていないのは？ | | 北大の 4 つの理念は知っていますか？ | |
| フロンティア精神 | 0.0% | すべて暗唱できる | 2.0% |
| 国際性の涵養 (★正解) | 7.8% | 二つ、三つは言える | 24.5% |
| 全人教育 | 45.3% | フロンティア精神しか知らない | 38.3% |
| 実学の重視 | 46.9% | すべて知らない | 35.2% |
| 昨日のメンタルヘルス講演会には参加されましたか？ | | 北大の 4 つの教育目標を自己評価すると？ | |
| はい | 43.9% | 教育目標 | |
| いいえ | 56.1% | 1) 高いコミュニケーション能力 | |
| 北大に勤めて何年目ですか？ | | 2) 社会・文化の多様性の理解 | |
| 1～4年 | 21.1% | 3) 創造的な思考力と建設的な批判能力 | |
| 5～9年 | 17.5% | 4) 社会的な責任と倫理の自覚 | |
| 10年以上 | 61.4% | かなり高い | 7.9% |
| | | 高い | 19.9% |
| | | 普通 | 42.9% |
| | | 低い | 16.8% |
| | | かなり低い | 12.6% |
| | | 将来の職業の希望は？ | |
| | | 大学教員 (研究中心) | 21.4% |
| | | 大学教員 (教育中心) | 7.8% |
| | | 大学以外の研究職 | 30.7% |
| | | 中高の教員 | 2.6% |
| | | 教育・研究職以外 | 37.5% |

生涯学習 LIFELONG LEARNING

平成 21 年度全学インターンシップ説明会を開催

4 月 15 日 (情報教育館多目的スタジオ型中講義室)、16 日 (クラーク会館講堂) に「平成 21 年度全学インターンシップ説明会」を開催し、両日に全学の学部生、大学院生約 280 名の参加がありました。なお、15 日はインターネット回線を活用し、函館キャンパスとも双方向の説明会としました。

今年度の説明会では、昨年度に全学インターンシップに参加した小山幸恵さん (経済学部 3 年生)、平尾有理奈さん (工学部 4 年生)、藤原美津穂さん (工学部 4 年生) 及び武藤綾さん (経済学部 3 年生) か

写真 1 昨年度の体験談 経済学部 3 年小山幸恵さん

それぞれ体験談を公表していただき、今年度の参加希望者に対する参加意欲の向上を図りました（写真1）。

その後、全学インターンシップの担当者である、生涯学習計画研究部亀野准教授及びキャリアセンター佐藤係長から制度や具体的な手続きの説明がありました（写真2）。

今後は、参加希望学生と企業等とのマッチング、事前研修を経て、夏期休暇中にインターンシップ実習を行う予定です。（亀野 淳）

写真2 説明をする生涯学習計画研究部 亀野准教授

北海道大学公開講座の受講者募集が始まります 「現代社会と倫理—安全・安心なくらしを実現するために」

今年度の公開講座は、安全・安心なくらしを実現するために、今日の社会を支えるべき倫理の問題について多面的に検討することをテーマにしています。昨年来、米国発の金融危機に端を発する不況の進行は資本主義の暴走とも言えるような現代社会の構造的な危機を露にし、建築や食品の偽装、個人情報漏洩など私たちのくらしを脅かす“非倫理的な”事件が相次いでいます。このような社会の現状に、私たちはどのように備えるべきなのか、なぜそのような問題が起きるのか、どうしたらそのような

問題をなくすことができるのか、について本学の教員たちが先端研究の成果を踏まえてお話しし、市民の皆さま方との相互交流の場にします。

具体的には、7月2日～30日の月・木の全8回(20日を除く)で、8つの講演が行われます。

受講者の募集は、6月9日から24日まで、講習料は5000円です。申し込みについての問い合わせは高等教育機能開発総合センター（学務部教務課）電話011-706-5429へお寄せください。（木村 純）

表1 講義テーマと講師

- | |
|--|
| 第1回「『リスク社会』を知る」（メディア・コミュニケーション研究院・筑和正格教授） |
| 第2回「リスクの社会倫理」（文学研究科・蔵田伸雄教授） |
| 第3回「農業に内在する倫理性」（農学研究院・佐野芳雄教授） |
| 第4回「循環型社会における安全・安心な社会基盤構造物」（工学研究科・杉山隆文教授） |
| 第5回「遺伝情報と倫理・社会問題」（情報科学研究科・渡邊日出海教授） |
| 第6回「企業不正と倫理」（経済学研究科・吉見宏教授） |
| 第7回「創薬開発と生命倫理」（薬学研究院・原島秀吉教授） |
| 第8回「看護と倫理～患者・家族の生活の質を支えるために」（保健科学研究院・佐藤洋子教授） |

センター日誌 CENTER EVENTS, March - April

3月

- 4日・(会議) 平成20年度第8回センター運営委員会
- 6日・(会議) 平成20年度第4回教務委員会
- 6日・(会議) 入学者選抜委員会
- 7日・一般選抜前期日程, 私費外国人留学生特別選抜合格者発表
- 12日・一般選抜後期日程入学者選抜試験
- 17日・(会議) クラス担任代表会議
・(会議) クラス担任全体会議
- 19日・(会議) 入学者選抜委員会
- 20日・一般選抜後期日程合格発表
- 24日・(会議) 平成20年度第13回教育改革室会議
・(会議) 平成20年度第6回学生委員会
- 27日・(会議) 第9回学生編成・学生募集単位検討WG

4月

- 6日・(行事) 全学TA研修会
- 7日・(行事) 新入生オリエンテーション
- 8日・(行事) 入学式
- 9日・(行事) 学部ガイダンス
- 10日・第1学期授業開始
- 14日・(会議) 平成21年度第1回学生委員会
- 21日・(説明会) 大学入試・入試説明会2009(札幌)
- 21日・(会議) 第1回総合教育部教育課程等編成WG
- 22日・(会議) 点検評価報告書作成部会
- 22日・(会議) 平成21年度第1回センター運営委員会
- 24日・(説明会) 大学入試・入試説明会2009(旭川)
- 27日・(会議) 第1回総合教育部学生指導体制検討WG
- 30日・(会議) 平成21年度第1回教育改革室会議
・(訪問) 八雲高校

全学教育行事予定 SCHEDULE, June - August

| | 【日(曜日)】 | 【行事】 |
|----|----------------|---------------------------|
| 6月 | 4(木) | 開学記念行事日(休講) |
| | 4(木)~7(日) | 大学祭[4(木), 5(金)は休講] |
| | 10(水)~12(金) | 履修登録した科目の取消し受付 |
| 7月 | 31(金) | 初習外国語統一試験日(通常授業は休講) |
| 8月 | 2(日), 3(月) | オープンキャンパス[3(月)は通常通り授業を行う] |
| | 4(火) | 火曜日の授業終了日 |
| | 6(木) | 木曜日の授業終了日 |
| | 7(金) | 金曜日の授業終了日 |
| | 10(月) | 月曜日の授業終了日 |
| | 11(火) | 授業を行わない日 |
| | 12(水) | 水曜日の授業終了日(第1学期授業終了日) |
| | 13(木)~9月30日(水) | 夏季休業日 |
| | 14(金) | 成績報告締切(非常勤[帳票]) |
| | 21(金)正午 | 成績報告締切(常勤[Web入力]) |
| | 28(金) | 平成18~21年度入学の1年次学修簿Web上公開 |
| | 28(金)~9月3日(木) | 1年次成績確認期間 |

センターニュース 2009, No. 79 目次

<巻頭言>新しい学部教育に向けて、全学教育の充実の方策
 脇田 稔 1

クラス担任・科目責任者からひとこと
 経済学部 11 組担任 濱田 康行 3
 理学部 18 組担任 高畑 雅一 3
 情報学企画責任者 工藤 峰一 4
 英語企画責任者 小川 泰寛 4

全学教育委員会報告 (第 76 回) 5

全学教育 TA 研修会を開催—192 名に修了認定— 8

「外部評価委員会の記録」を刊行 11

ヨーロッパにおけるダブルディグリー制度
 大野 公裕 12

筑波大学と教育改善に関する協定を締結 .. 13

筑波大学・北海道大学共催国際シンポジウムを開催 14

クリッカーをアンケートに活用 16

平成 21 年度全学インターンシップ説明会を開催 17

北海道大学公開講座の受講者募集が始まります「現代社会と倫理—安全・安心な暮らしを実現するために」 18

センター日誌・全学教育行事予定 19

目次・編集後記 20

編集後記

昨秋に研究部に着任し、初めての春を迎えました。夕方、仕事が一段落して窓の外を眺めると、中央通りの緑が朝よりもはつきりと濃くなっているのを感じ、驚くことがあります。研究棟はセンターの中にあるため、講義室だけでなく、研究室周辺や図書館、食堂でも、新入生に囲まれての暮らしです。休み時間に教室を探して研究棟に迷い込んでしまい、通りかかった私に教室を教えてくださいと迫る姿、昼休みの学食で目にする、ちょっとくたびれた表情。見ているだけで胸が一杯になってしまうのは、自分にもそんな時があったと思い出すからでしょう。

今年度最初のセンターニュースをお届けします。全学教育の科目責任者、クラス担任の方々に、日々の思いをお寄せいただきました。心温まるエッセーを拝読し、教職員の一人として初々しい皆さんの学びと育ちに間近で関われることに、改めて深い喜びを感じています。(猶)

センターニュース 第 79 号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)
 発行日：2009 年 6 月 5 日
 発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター
 〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
 電話 (011)716-2111 ・ FAX (011)706-7854
 編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅・安藤厚
 木村 純・川初清典・亀野 淳・三上直之
 山岸みどり・鈴木 誠・池田文人
 ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
 電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521
 インターネット ホームページ：
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>